

## コリント人への手紙第一 9章 「福音のための自由」

### **1A 働きの権利の放棄 1-18**

#### 1B パウロの使徒職 1-2

#### 2B 働きの分け前 3-14

##### 1C 使徒たちの権利 3-6

##### 2C 働きの報酬 7-10

##### 3C 福音の働きによる報酬 11-14

#### 3B 福音宣教の誇り 15-18

### **2A ただ一つの目標 19-27**

#### 1B 人の獲得にある適応 19-23

#### 2B 賞の獲得にある節制 24-27

## 本文

コリント人への手紙第一 9章を開いてください。9章は、福音宣教に対するパウロの一途な思いを読むことができます。福音を語る次ぐために、他のあらゆることを横に置いているパウロの姿を見ることができます。

そして、その中で、教会の人々が知らなければいけない大切な教えも書かれています。それは、福音の働きの従事している人々には、生活の支えをすべきであるという教えです。パウロは、他の手紙でもこの点については一貫して教えていて、また主ご自身も教え、律法においても教えられています。また、人々が救われるために、ユダヤ人にはユダヤ人のように、異邦人には異邦人のようになる、という宣教における姿勢も話しています。

### **1A 働きの権利の放棄 1-18**

#### 1B パウロの使徒職 1-2

<sup>1</sup> 私には自由がないのですか。私は使徒ではないのですか。私は私たちの主イエスを見なかったのですか。あなたがたは、主にあって私の働きの実ではありませんか。

パウロは、8章において、偶像に献げた肉について話していました。そこで、コリントの人たちが、自由に食べてよいのだということで、偶像の宮でも肉を食べていたことについて、パウロがその問題点を話していました。弱い人へのつまずきとなり、それがキリストに対する罪であるとパウロは述べて、自分は肉を食べないと言いました。

そこで話題をパウロはがらっと、変えます。コリントの人たちは自分たちの権利、自分たちの自由

のことは話しているけれども、パウロたちのことを考慮していなかったのです。パウロに対する批判は、大いに行っていました。けれども、そこで相手に対する敬いというものがなかったのです。ピリピ人への手紙にはこうあります。「2:3-4 何事も利己的な思いや虚栄からするのではなく、へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい。4 それぞれ、自分のことだけでなく、ほかの人のことも顧みなさい。」彼らの生活の支えについて、その権利、自由は考慮がありませんでした。

コリントの人たちの一部に、パウロの使徒職を疑っている人々がありました。そう言い含めている初めの十二使徒ではないし、エルサレムから来ていないし、使徒を自称しているだけなのだと断言していたのです。このことについては、コリント人への手紙第二で、パウロがじっくりと取り扱っていますが、ここでは、使徒であることのしるしとして、「私たちの主イエスを見なかったのですか。」と断言しています。パウロは三日後のよみがえられた主を見ていませんが、ダマスコに行く途上で、復活の主イエスがパウロに現れてくださっています。

そして何よりも、コリントの人たちの問題は、自分たちの知識を誇っていて、肝心の「関係」を見失っていることでした。「あなたがたは、主にあって私の働きの実ではありませんか。」とありますね。自分たちが、パウロの働きを通して救われたということを忘れていました。

<sup>2</sup> たとえ私がほかの人々に対しては使徒でなくても、少なくともあなたがたに対しては使徒です。あなたがたは、私が主にあって使徒であることの証印です。

パウロ自身が、コリント人たちに対して、使徒の賜物を用いていました。彼らこそが、パウロが使徒であることの証人となることができました。よく言われますが、近しい人たちほど、自分たちの恵みが分からなくなりますね。パウロの働きによって、神の恵みを彼らが知りましたが、それが受け取ったものだということを忘れて、聞きかじりの話でパウロを裁いていたのです。

## 2B 働きの分け前 3-14

### 1C 使徒たちの権利 3-6

<sup>3</sup> 私をさばく人たちに対して、私は次のように弁明します。<sup>4</sup> 私たちには食べたり飲んだりする権利がないのですか。<sup>5</sup> 私たちには、ほかの使徒たち、主の兄弟たちや、ケファのように、信者である妻を連れて歩く権利がないのですか。<sup>6</sup> あるいは、私とバルナバだけには、生活のために働かなくてもよいという権利がないのですか。

エルサレムにいる使徒たち、ペテロなどは、教会において生活の支えを受けていました。そして、ペテロには奥さんがいました。福音書で、カペナウムのペテロの家は、おそらく自分の妻の家ではないかと思えます。イエス様が、彼の姑が熱を出しているのを癒されているからです。ペテロは、自分だけでなく、彼の妻の分を含めた生活費が与えられていたことでしょう。同じく、主の兄弟ヤコ

づも、他の使徒たちも妻がいて、子もいたことでしょう。

しかし、パウロやバルナバは、アンティオキアで生まれた教会から遣われていて、彼らは自分たちで働いて生活費を得ながら、宣教を行っていたのです。コリントの人たちは、自分たちが、このアンティオキアから遣わされた働き人によって救われ、養われていたのに、元祖エルサレムではないということで見下されていたのです。

教会において、しばしば、そのようにしてその奉仕の専従している人々がないがしろにされることがあります。自分自身は霊的にも、いろんな意味でも養われているのに、「この牧師はなっていない」として批判します。そして、今の時世であれば、話のうまいユーチューブの説教者と比べます。そして、牧師たるものはこうでないといけないと、常識では到底、生きることのできない基準を押し付け、自分自身は裕福に過ごしています。こんなことがコリントの教会でも起こっていました。

### 2C 働きへの報酬 7-10

<sup>7</sup> はたして、自分の費用で兵役に服す人がいるでしょうか。自分でぶどう園を造りながら、その実を食べない人がいるでしょうか。羊の群れを飼いながら、その乳を飲まない人がいるでしょうか。

パウロはまず、生活における原則、いわゆる常識から話しています。兵役であれば、自分の働きについて、自腹でする人などいません。古今東西、国によって支給されます。農作業にしても、自分の育てた作物を売りに出しますが、そこから自分の生活の糧を得ます。羊飼いの同じです。

<sup>8</sup> 私がこのようなことを言うのは、人間の考えによるのでしょうか。律法も同じことを言っていないのでしょうか。<sup>9</sup> モーセの律法には「脱穀をしている牛に口籠をはめてはならない」と書いてあります。はたして神は、牛のことを気にかけておられるのでしょうか。<sup>10</sup> 私たちのために言っておられるのではありませんか。そうです。私たちのために書かれているのです。なぜなら、耕す者が望みを持って耕し、脱穀する者が分配を受ける望みを持って仕事をするのは、当然だからです。

興味深いパウロによる解釈です。もちろん、聖霊の導きによる解釈です。まず、7節で話していることは世の常識であって、霊的には違うでしょうという反論に対して、律法も同じことを言っていると述べています。聖書も原則として、そのことを定めているのです。そこで、「脱穀をしている牛に口籠をはめてはならない」という、牛の働きに対する分け前について話しています。パウロは、律法の意味するところを解釈しています。神が、働く者がその成果の分け前を受け取るのは当然であるとして、イスラエルの民がいつも携わっている、脱穀をする時の牛に当てはめているということです。

### 3C 福音の働きによる報酬 11-14

<sup>11</sup> 私たちがあなたがたに御霊のものを蒔いたのなら、あなたがたから物質的なものを刈り取ること

は、行き過ぎでしょうか。

今まで見てきた例は、収穫の分け前であるとか、兵役であるとか、物質的なことに対する物質の報酬でした。けれども、御霊のものを蒔いたら、物質的なものを刈り取ることに当てもあつてはまるでしょうか？と、パウロは問いかけています。

<sup>12</sup>ほかの人々があなたがたに対する権利にあずかっているのなら、私たちは、なおさらそうではありませんか。それなのに、私たちはこの権利を用いませんでした。むしろ、キリストの福音に対し何の妨げにもならないように、すべてのことを耐え忍んでいます。

コリントの人たちは、おそらくはエルサレムから来た教師たちには、物質的な支援をしていたようですね。だから、コリントの人たちは考えがおかしいのです。そういった外から来た人々には、そのような常識を働かせていたのに、こと、パウロやシラス、またテモテなどの働き人たちには、不公平な厳しい批判の目を向けていたのです。感情的な問題ですね。近しいからこそ、かえって反発してしまう子供の心なのかもしれません。「Ⅱコ 6:12 あなたがたに対する私たちの愛の心は、狭くなってはいません。むしろ、あなたがたの思いの中で狭くなっているのです。」

けれども、ここで、パウロたちが、物質的なものを受け取る権利を用いなかったと言っています。つまり、自分たちで働いて生活の糧を得ていました。具体的には、パウロは天幕作りをしていました。そしてその理由が、意味深いです。「キリストの福音に対し何の妨げにもならないように、すべてのことを耐え忍んでいます。」ということです。これら、エルサレムから来たと自称している教師たちがいて、彼らの中には、カルトまがいの酷いことをしていた者たちもいたようです。「Ⅱコリ 11:20 実際あなたがたは、だれかに奴隷にされても、食い尽くされても、強奪されても、いばられても、顔をたたかされても、我慢しています。」酷いものです。しかし、その中にあって、なぜか、全く奪い取っているどころか、自分たちで与えているばかりのパウロたちに対して、同じような疑いの目が向けられかねない状況がありました。

カルトまがいの人たちの与える傷は、霊的には、健全な教えであるのに、その濫用によって人々の、その健全な教えを受け取るのを妨げるようにすることです。例えば、指導者に従いなさいというのは、新約聖書に出てくる教えです。けれども、そうした箇所を使って信徒たちに権力をふるまい、横暴なことをしている者たちは、今でも少なからずいます。そこで、その傷を受けた人たちは、従うというような言葉を聞けば、生理的に拒絶反応が出てしまいます。こうした問題の筆頭は、献金です。貧しい人々からむしり取るという問題は、イエス様がマタイ 23 章で糾弾しておられるように、パリサイ派や律法学者たちの間にもありました。それで、福音のために骨折っている人々を、物質面でも敬意を示すということを話すものなら、むしろ取るのか？という反応になってしまいます。パウロは、今、具体的に自分たちの生活を、その働きのゆえに金銭的に支えなければいけないと

命じるならば、そういった反応を招きかねない状況だったので、それでは福音が福音として伝われないと判断したのです。それで、働きながら福音を伝え、みことばを教えることはかなり大変だったけれども、それでも耐え忍んだのです。

<sup>13</sup> あなたがたは、宮に奉仕している者が宮から下がる物を食べ、祭壇に仕える者が祭壇のささげ物にあずかることを知らないのですか。<sup>14</sup> 同じように主も、福音を宣べ伝える者が、福音の働きから生活の支えを得るように定めておられます。

霊的な事柄に仕えたら、物質的な報酬を得ることについては、実は他の律法の箇所にも書かれています。それは、祭司たちです。祭司たちは、聖所にて、臨在のパンを供えます。週ごとに取り替えますが、その古いものは自分たちがあずかります。同じように、祭壇で火で焼くいけにえも、その一部にあずかるように定められていました(民数 5:9-10)。そして実はイエスご自身も教えています。「マタ 10:10 袋も二枚目の下着も履き物も杖も持たずに、旅に出なさい。働く者が食べ物を得るのは当然だからです。」だったらイエス様が命じられたことを、まず語ったらとふと思いましたが、いえいえ、主は新奇なことを語られたのではなく、律法の教えられていることを教えられたということで、主の教えを補強してきたのです。

### 3B 福音宣教の誇り 15-18

<sup>15</sup> しかし、私はこれらの権利を一つも用いませんでした。また、私は権利を用いたくて、このように書いているのでもありません。それを用いるよりは死んだほうがましです。私の誇りを空しいものにするのは、だれにもできません。

とても大切なことを書いています。「私はこれらの権利を一つも用いませんでした。」と書いています。コリントの人たちは、自由、自由と言っていますが、本当の意味で自由なのでしょうか？パウロのように、本当は自由にしていよいこと、権利のあることであっても、それを敢えて用いないというところに、もっと自由があるのではないのでしょうか？その権利を主張しても、だれからも責められません。けれども、それを福音のために敢えて用いないとする力のほうが、もっと大きいのではないのでしょうか？イエス様は、十字架に付けられている時に、神の子であるならば、キリストならば、十字架から降りてみろ、と罵られました。それはいとも簡単にできたのです。そこにいる罵る者たちを、一瞬にして滅ぼすことはできたのです。それでも、彼らをお赦しくださいと祈ることに、その力と自由を用いられました。

そしてパウロは、自分の誇りについて話しています。福音宣教者としての誇りです。この生活への支援についての話は、それを受ける側が果たすのは、自分がそれを欲しがっていると思われる引け目が出ますね。けれども、パウロは、福音の真理を語る宣教者であり、神のみことばを教える教師です。主がそうだと思われることを語らないでいることは、不誠実になります。それで、

「私は権利を用いたくて、このように書いているのでもありません。」と言っているのです。

しかし、その権利を用いたら、コリントにおける状況を考えると、他の偽教師らと同じようになってしまいます。つまり、金欲しさに福音の働きをしているということになります。しばしば、何か就職先だと勘違いして、教会の奉仕をしたがる人々がいます。教会が多くて、規模が大きいところであれば、そういった勘違いをする人々が出てきます。酷いのは、キリスト教の文化圏にある国々では、マフィアが牧師に、「たくさんお金あげるから、この死んだ人が天国にいると言ってくれ。」というお要求までしてくるような逸話が出てくるほどです。福音は、この世の金銭の報酬とは全くけた外れの、永遠のいのちというとても報いをもたらすものなのに、それを金銭で交換できるという浅ましきで、自分の魂を売ってしまうことなど、死んだほうがましだということでもあります。

<sup>16</sup> 私が福音を宣べ伝えても、私の誇りにはなりません。そうせずにはいられないのです。福音を宣べ伝えなければ、私はわざわざいす。<sup>17</sup> 私が自発的にそれをしているなら、報いがあります。自発的にするのでないとしても、それは私に務めとして委ねられているのです。

今、自分の誇りのことを話したので、「自分は、福音を語っているのだ」ということが誇りになっているのだろうか？と疑いがかけられているかもしれないと思って、弁明しています。誇りではないと。彼の言っている誇りは、そういったことではないのですね。自分の福音宣教を利得の手段にするぐらいなら、死んだほうがましだというような誇りです。人間的に言うならば、魂を売るといような表現に近いです。女性であれば、体を売るといような話です。死んだほうがまし、と思うでしょう。

けれども、そうした彼らの的外れな批判に対して弁明する時に、パウロは、さらに大切な教えを改めて教えているところがいいと思います。それは、自分が自発的に、「私は、主の福音を伝えます！」と言って、ボランティアをしているのではないということです。そうではなく、務めとして行っているのだと言っています。そうせずにはいられなくて、しているのです。さらに突っ込んで、「福音を宣べ伝えなければ、私はわざわざいす。」ということです。これを、福音宣教の働きに召されているという、神の召しを良く言い表した言葉です。

神の召しについて、ことに神のことばを伝えることに召される典型として、エレミヤの経験があります。エレミヤに預言が与えられて、それを語ると、反対され、迫害ばかり受けます。それでこう言いました。「20:9 私が、『主のことばは宣べ伝えない。もう御名によっては語らない』と思っても、主のことばは私の心のうちで、骨の中に閉じ込められて、燃えさかる火のようになり、私は内にしまっておくのに耐えられません。もうできません。」こうやって、逃げても逃げても、それでも神が自分を捕らえている時に、それが召しと言ってよいでしょう。

<sup>18</sup> では、私にどんな報いがあるのでしょうか。それは、福音を宣べ伝えるときに無報酬で福音を提供

し、福音宣教によって得る自分の権利を用いない、ということです。

ここでパウロが言わんとしていることは、福音が福音として伝わる時に、それを無報酬で行い、また自分の権利を行使しないで行う時に、福音の香りが鮮やかに解き放たれるということを言い表しています。これが、彼にとっての報いです。彼にとっての報いとは、福音が福音として伝わり、何の妨げもなく広がっていくことであります。使徒の働きの最後の文言が、彼にとって願ったり、かなったりのことでした。「28:31 少しもはばかりことなく、また妨げられることもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。」

## **2A ただ一つの目標 19-27**

ここで「自由」ということを考えさせられます。自由というのは、一つの目標のために、それが達成されるために、邪魔されることも、妨げられることもないようにする自由と言ってよいでしょう。パウロは、その自由を二つの言葉で言い表しています。初めに、19 節から、「すべての人の奴隷になりました」ということ。もう一つは、24 節にある「賞を得られるように走りなさい」ということです。

## **1B 人の獲得にある適応 19-23**

<sup>19</sup> 私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷になりました。<sup>20</sup> ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人たちには—私自身は律法の下にはいませんが—律法の下にある者のようになりました。律法の下にある人たちを獲得するためです。<sup>21</sup> 律法を持たない人たちには—私自身は神の律法を持たない者ではなく、キリストの律法を守る者ですが—律法を持たない者のようになりました。律法を持たない人たちを獲得するためです。<sup>22</sup> 弱い人たちには、弱い者になりました。弱い人たちを獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。何とかして、何人かでも救うためです。

午前中に、「自由でだからこそ従える」という題名で、19 節からお話しました。自由だからこそ、その権利を敢えて横において、自らをしもべとして従わせることのできるのだということです。パウロにとって、すべての人に福音を伝えることが最も大きな願いでした。その中で、何とかして、何人かでも、イエスの御名によって救われることが願いでした。そのためであれば、自分がすべての人のしもべになってもいとわなかったのです。

ユダヤ人が、自分の自由や権利を守るために、ユダヤ性に固執することは、実は自由ではありません。異邦人も異邦人なのだから、割礼を受けなくてもいいのだ、自由なのだと言主張することもできますが、その自由に固執する必要もありません。パウロは、ユダヤ人の手前、ギリシア人が父のテモテに割礼を施させました。父がユダヤ人であれば、子もユダヤ人というのが、当時のユダヤ教の考えでした。けれども、ユダヤ人の会堂で福音を伝えます。その時に、テモテが割礼を受けていないということであれば、いちいち、そのことで、彼から福音は聞くことができないという話になっ

てしまいます。福音を福音として聞いてもらうのに、妨げになるのです。だから、もちろん異邦人は割礼を受けなければ救われないというのは偽りの福音なのですが、そうではなく、福音を福音として伝えられるのであれば、その他のことは横に置くことができる自由です。

この箇所は、福音宣教の働きには大原則になっている言葉です。英国人で、ハドソン・テラーという人が中国宣教をしました。彼以前は、上海など海岸地域の都市部への宣教は行われていましたが、彼の働きで福音が内陸に広がっていきました。これまで、英国の文化が現地にそれよりも発達しているので、現地の人たちもそのようになることがよいとされ、中国にいても英国人のような生活をしていました。ところが、ハドソン・テラーは変えました。時は清の時代、白人の彼は頭を辮髪にしたのです。日本の宣教でも同じようなことがありました。戦国時代のことですが、カトリックの宣教師たちには、日本文化を蔑視している者たちもいました。しかし、イエズス会には、文化適応主義といって、多くの宣教師は、聖書で罪とされているもの以外は日本人のようにして生きました。ある人は、魚や野菜ばかり食べて、急に痩せてしまって、彼のことを知っている他の宣教師たちが彼を見て、本人だと分からなかったという話まであります。

牧者チャック・スミスは、福音を語れるのであれば、招かれたところはどこへでも行くという方針を持っていました。それが、カトリックの教会においてでもです。カトリックの教義については、もちろん私たちプロテスタントの信仰を受け継いでいる者たちとは、かなり違うものがあります。そこで原理主義的な人々には、カトリックの人たちは救われていない。彼らはキリスト者ではないと断言する人たちさえいます。そして、カトリックの人たちと関わることさえ、それは福音に妥協していると教えます。けれども、これはパウロがここで語っている姿勢とは、かなり違うのでは？と思うのです。カトリック教会では、イエス様の母マリアが、必要以上にあがめられていると感じます。だからといって、マリア叩きをする必要はありませんね？マリアを叩かなくとも、イエス・キリストを宣べ伝えることができます。

ここで大事なのは、パウロが但し書きを入れていることです。ユダヤ人に対しては、「私自身は律法の下にはいませんが」と言っています。異邦人に対しては、「私自身は神の律法を持たない者ではなく、キリストの律法を守る者ですが」と言っています。これは何を意味しているかというと、福音宣教のために、自分が文化的にその人と同じになる必要はないということです。むしろ、キリストと自分の結びつきを確かなものにすればするほど、それ以外のことがさほど重要なことではないことが分かり、柔軟に変えていくことができる、ということです。

その模範は、大使徒であられるイエスご自身です。イエス様は、人としてはユダヤ人として生まれ、彼らの間で生きられました。父なる神との関わりは全く変わることなく、その中で生きられたのです。こうして、周りの人々、特にユダヤ人は、イエス様に会っても大きな違和感を抱くことなく、むしろ、その言葉と行いにおいて、この方は神から来られたのだと知ることが出来ました。同じように、

宣教者は、イエス様から使われています。イエス様につながっていて、イエス様に遣わされていることを知っているならば、自ずと自分はその遣わされた人々を愛するようになるし、そこに溶け込むようになります。しかし、それはその現地の人になることが目的ではなく、むしろ、現地の人々が自分の生活を見て、イエス様という方がいるのだと知るようになるためです。これを、難しい言葉になりますが、宣教学の言葉で「受肉の宣教」と言います。イエス様が神であられるのに、それに固執されず、肉体を取られることによって、人々が神を知ることができたという宣教です。

日本にいと、二つの極端に陥りがちな宣教師に気づきます。一方では、「これぞ福音だ！」と言って、アメリカ人丸出しで、ごり押し伝道をして、それに付いていけない日本人を見て、「日本人は心が堅い」と嘆くことです。そのアメリカ丸出しのごり押しをしているから、そりゃあ、ひいちゃうよと思います。それで、日本人のクリスチャンの中には、「アメリカ人宣教師は日本のことを大事にしない。」と批判するのですが、それも違います。他方では、日本にマニアックに好きになって、日本人になろうとする人々がいます。けれども、これも、ずれているのです。侍、忍者、芸者、寿司、アニメとか、そんなのに興味を持ったところで、人々は救われないのです！それが、パウロが但し書きを付けた理由です。福音が福音として伝わるために、自分にある福音とは関係のない文化的壁を取り除くことであって、自分がキリスト者として生きることには全くぶれがありません。その文化で生きる人になることが目的ではないのです。

<sup>23</sup> 私は福音のためにあらゆることをしています。私も福音の恵みとともに受ける者となるためです。

あらゆることをしています。ここに、神の福音が広がるのが、彼にとっての目標となっていることが分かります。この一つのことに目を留めていて、他に邪魔になるようなものがあればそれを取り下げる勇気があります。けれども、彼はそこにある恵み、祝福を知っているのです。福音を語り、人々が救われるのを見る時、それは自分がしてあげたということではなく、その救いの喜びに自分もあずかれるのです。一方の方向ではないのです、双方向なのです。

キリスト者の交わりもそうですね、自分だけが受けようとして交わろうとしてもそれは無理です。自分が相手を自分に与えらえている賜物を用いて分かち合おうとするところに、自分も受けるという良循環が起こります。「ロマ 1:11-12 私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでも分け与えて、あなたがたを強くしたいからです。12 というより、あなたがたの間であって、あなたがたと私の互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです。」

## 2B 賞の獲得にある節制 24-27

<sup>24</sup> 競技場で走る人たちはみな走っても、賞を受けるのは一人だけだということを、あなたがたは知らないのですか。ですから、あなたがたも賞を得られるように走りなさい。

パウロが、自由というものを、競技場で走る人に喩えています。コリントの人たち、いや、当時のローマ社会の異邦人の人たちには、とても馴染みのあるのが、オリンピックなどのスポーツ競技です。スポーツというのは、一定の規則、ルールはありますが、その中では、自分は何をしても自由です。このように走りなさい、このように動きなさいという規則はありません。重量挙げをする人が、前日まで、ランニングして走ることをやっていたとしても、何の咎めも受けません。また逆に、短距離走をする人が前日まで、重量挙げをしてもかまわないのです。けれども、それは目標を見失った練習ですね。競技場で走るのであれば、それは賞を得るために走るのです。

ところが、自由というと、コリントの人たちが考えるように私たちも考えてしまいます。つまり、自由なのだから、罪を犯さないぎりぎりのところで生きていけばいいだろうと思ってしまうことです。それで、「これこれをするのは、罪ですか？それとも、罪ではないのですか？」と尋ねるのです。そうではないですね。もちろん、罪ではないものは、たくさんあります。自由なのです。けれども、その自由というのは、目標があってそこに向かって一心に走り、重荷になったり、邪魔になるものは極力避けるということによって、達成できます。

<sup>25</sup> 競技をする人は、あらゆることについて節制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。<sup>26</sup> ですから、私は目標がはっきりしないような走り方はしません。空を打つような拳闘もしません。

節制するというと、自由が奪われると思いますね。いいえ、これは敢えて、賞を得るために自分が抑えているものがあるのです。もし短距離走であれば、ぜい肉になるようなものは食べないでしょう。逆に、ヘビー級のボクサーであれば、体格が良くなければ勝てません。重量無制限の柔道の選手も、東京五輪で、相当のご飯を食べる話をしていました。これも、ある意味で節制ですね。賞を得るためには、体重をある時には減らすし、またある時には増やします。

これが、パウロが、福音のために報酬を得る自由と権利はあるけれども、それを敢えて用いなかったといった理由であり、また、ユダヤ人にはユダヤ人のように、異邦人には異邦人のようになったということです。そこには、節制という要素があります。そして、当時は、ユーカーの葉によって、冠が造られていました。けれども、後にキリストが来られる時に下さる冠は、永遠に続く報い、朽ちない冠です。

コリントのキリスト者たちは、すべてのことが許されていると言って、偶像に献げた肉を食べ、近親相姦の罪を犯している男を容認し、また派閥を造るなどしていました。それは、走っているけれども、ただ漫然と走っていることになります。また、古代オリンピックにも、ボクシングがありました。かなりの人気でした。皮を拳に巻いて、殴り合いました。ですから、コリントの人たちにとって、「空を打つような拳闘」はすぐに想像できました。練習で、空に拳闘しているだけでは、十分な鍛錬に

はなりません。賞を取るためには、空を打つだけでなく、対戦相手が必要です。しかし、コリントの人たちのような生き方では、「まあ、いいじゃねえか。」ということで、空を相手に拳闘しているようになっているのです。

ここで大切なのは節制のために節制ではないということです。何か、肉体に苦行を与えることが靈性を高めるとするならば、それもまた偽りの教えになってしまいます(コロ 2:23 参照)。そうではなく、福音のためならば、節制すれば広がっていくのであれば節制するという、必要に迫られた節制であります。これはパウロだけでなく、イエス・キリストに終わりの日にお会いして、この方にあずかるのは全員そうですから、その目標がはっきりした生き方を今からでも始めていくことです。

<sup>27</sup>むしろ、私は自分のからだを打ちたたいて服従させます。ほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者にならないようにするためです。

賞を得るために走っていても、競技の規則に違反することになったら、走るどころか失格してしまいます。福音宣教において、自分が宣べ伝えていることと逆のことをしているならば、失格者になってしまいます。ですから、そのためにある時には、自分のからだを打ちたたいて服従させることまでしています。パウロは次の章で、貪り、偶像礼拝、淫らな行いなどによって、自分が倒れないように、コリントの人たちに警告しています。自分自身がこれらのことを行っていたら、福音が広がるどころか、自分がそれ以上、関わっていたら、むしろ、つまずきを増やすだけで福音の広がりを邪魔してしまうとっていたのです。それで、時には自分のからだを打ちたたくことさえした、ということです。これは文字通り行ったということもありますが、大事なことは「服従させる」ということであり、どんな力にも支配されないという自由を保つためです。御霊に従うとは、肉との熾烈な戦いがあります。その戦いに打ち勝つことです。